様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３１２

研究課題名（和文）ハリエット・ビーチャー・ストーと反奴隷制文学

研究課題名（英文）Harriet Beecher Stowe and Antislavery Literature

研究代表者
野口　啓子（Noguchi, Keiko）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：６０１８０７１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀中葉の奴隷制をめぐるテクストを文学としてとらえ、その相互影響性を視野に入れながら、それらがアメリカ文学における一つのジャンルを形成している可能性を探ることを目的として、なかでもとりわけ大きな影響力をもったハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心に検証した。その結果、反奴隷制文学というものが、人種やジェンダーや階級を超えて、共通した特徴をみせること、また、これまで見逃されたきた作品が新たに重要な文学テクストとして浮上するなど、予想をはるかに超えた大きな文学ジャンルとして系統づけることができた。これによりアメリカ文学史の捉えなおしが可能となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to explore the possibility that antislavery literature in mid-nineteenth-century America has formed a literary genre, by examining various antislavery texts published in that era. Considering the great impact of Harriet Beecher Stowe's "Uncle Tom's Cabin," this study focuses on the novel and its influence on other stories and documents. As a result of this study, it has becomes evident that the antislavery literature can be a new important genre of American literature which includes far more works than expected, going beyond racial, gender, and class differences, and many works that have been neglected. The perspective of this study, antislavery literature, provides us with a possibility to revise the literary canon of what we call American Renaissance which has been traditionally predominated by male white authors since F. O. Matthiessen's classical book, "American Renaissance," was published in 1941.

研究分野：ルネッサンス期アメリカ文学

キーワード：ハリエット・ビーチャー・ストー　アメリカン・ルネッサンス　反奴隷制文学

１．研究開始当初の背景

アメリカン・ルネサンスの文学については、これまで国の内外で、膨大な研究が蓄積されてきた。しかし伝統的にその「主流」とみなされてきたのは、Ｆ・Ｏ・マシセンの古典的名著『アメリカン・ルネサンス』（1941）に明確に現れているように、エマソン、ソロー、ホイットマン、ホーソーン、メルヴィルといった白人男性作家であった。これに対し、ジェイン・トムキンズは『センセーショナル・デザイン』（1985）のなかで、19 世紀中葉に人気を誇った感傷小説に注目し、ストーやスーザン・ウォーナーなど、次々とベストセラー小説を世に送り出した女性作家たちを再評価し、「もう一つのアメリカン・ルネサンス」と定義づけた。これとは別にデイヴィッド・レナルズは『アメリカン・ルネサンスの地層』（1988）において、ルネサンス期の大衆文化・文学に着目し、この時代のアメリカ文学を幅広いサブカルチャーの視点から逆照射してみせた。

本研究は、このようなアメリカン・ルネサンス再評価の流れのなかで、さらなる「もう一つのアメリカン・ルネサンス」の可能性をストーを中心とした反奴隷制小説のなかに探ろうとして始めたものである。

２．研究の目的

スレイヴ・ナラティヴの代表傑作の一つを著した 19 世紀の黒人指導者フレデリック・ダグラスは、ストーが『アンクル・トムの小屋』（1852）によって起こした奴隷制反対運動の大きなうねりに言及し、この時代が後に「反奴隷制文学」の時代として記憶されるであろうと述べているが、この言葉は次の 2 点において示唆に富む。すなわち、（１）スレイヴ・ナラティヴを含む一連の作品を「反奴隷制文学」という大きな文学ジャンルのなかに位置づけていること、（２）19 世紀中葉のアメリカ文学の特質を奴隷制と関連づけることで、「自然と自由」を国民文学の中心テーマと位置付けた白人男性作家中心の文学的ナショナリズムに一つのアンチテーゼを提示していることである。本研究はこれら 2 点に準拠し、伝統的なスレイヴ・ナラティヴの枠組で発表された「自伝」とストーに代表される反奴隷制小説を、「反奴隷制文学」として包括的に検証し、それらがルネサンス期アメリカ文学にどのような影響力をもち、どのような位置を占めたのか、さらには後の時代にどのように発展していったのかを明らかにしようとしたものである。また、これにより、「もう一つのアメリカン・ルネサンス」の可能性を示唆しようとした。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、中心となる作家（チャイルド、ストー、ダグラス、ブラウン、ジェイコブズら）の個別研究が重要となるのは言うまでもないが、これらの作家の文学に直接・間接に影響を与えた当時の奴隷制反対を唱えた雑誌や新聞も吟味した。これにより、その影響関係や間テクスト性について検証することで、個別の作家の独自性と、歴史的な共時性、レトリックの共通項などに留意した。

（１）初年度は、本研究において「初期反奴隷制文学」と位置付けた 1850 年代以前の奴隷制をめぐる言説を広範に検証、その特徴を考察した。その際に主として以下の点に留意した。

①共和国の理念の根拠となる「独立宣言」と合衆国憲法と奴隷制との矛盾について検証する。

②ダグラスらによるスレイヴ・ナラティヴの言説におけるギャリソン派の影響を考察するために、ウィリアム・ロイド・ギャリソン編集の『リベレイター』における奴隷制をめぐる議論を丹念に吟味する。

（２）次年度は、1850 年代のストー、ダグラス、ブラウン、ジェイコブズらを中心に、個々の文学的特徴ならびに人種・ジェンダーによる差異などを検証し、彼らの作品がいかに一つの大きな「反奴隷制文学」を形成しているか、さらに、それらがいかにアメリカ文学の重要な要素となり得ているかを検証した。特に、ストーの他の作家への影響、並びにストーが他の作家から受けた影響について、丹念に考察した。

（３）最終年度は、上記 2 年間の研究で得られた成果をもとに、1850 年代の反奴隷制文学が、その後のアメリカ文学にどのような影響を与え、どのように変容しつつ継承されていったかについて、主としてチャイルドの『共和国のロマンス』（1869）およびマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（1884）『まぬけのウィルソン』（1894）を中心に検証した。

４．研究成果

本研究は、１９世紀中葉の奴隷制をめぐる言説を文学としてとらえ、その間テクスト性を視座に据えながら、それらが「もう一つのアメリカン・ルネサンス」を形成した可能性を探ろうとしたものである。その際に、このテーマに多大な影響を及ぼしたハリエット・ビーチャー・ストーの『アンクル・トムの小屋』の重要性を鑑み、この作品を中心に、反奴隷制小説やスレイヴ・ナラティヴの検

証をおこない、相互関連性や人種・ジェンダー・階級による差異とそれらを超えた共通性を明らかにすることで、この時代の反奴隷制文学を一つの文学ジャンルとして系統づけようとした。

（1） 初年度は1850年代以前の奴隷制をめぐる言説を「初期反奴隷制文学」としてとらえ、この時代の特徴を検証するために、デイヴィッド・ウォーカーやリディア・マリア・チャイルドによるプロテスト文学の考察、ダグラスを中心としたスレイヴ・ナラティヴの特徴の考察を行ったが、この時代に早くも「独立宣言」との矛盾に対する言説やレトリックが顕著に表れていることが明らかとなった。

この時代の膨大な関連資料をリサーチする課程で、リチャード・ヒルドレスの『アーチ―・ムーア』（1836）という、スレイヴ・ナラティヴを装った白人男性による反奴隷制小説を発見できたことは、本研究にとり予期しない大きな成果となった。これにより、これまで最初の反奴隷制小説とされていたストーの『アンクル・トム』の位置づけが修正されたばかりか、ダグラスの 1845 年版自伝やストーの『アンクル・トム』への影響を確認することができた。『アーチ―・ムーア』はいわば、初期反奴隷制の言説と 50 年代の反奴隷制文学をつなぐ「ミッシング・リンク」だったと言えよう。この研究成果は、“Richard Hildreth’s The Slave; or, Memories of Archy Moore: A Precursor of Antislavery Fiction” (雑誌論文②)で発表した。

また、チャイルドの考察を進める過程で、彼女の作家としての変遷をたどる必要から、当初は最終年度に予定していた『共和国のロマンス』（1867）の研究を先取りして行うこととなった。その結果、この小説がストーの『アンクル・トム』の延長線上で書かれているばかりか、後の時代のアメリカを代表する作家マーク・トウェインにつながる作品であり、かつ、男性主導の民主国家像を女性の視点から修正を迫ったものであることが明らかとなった。この研究成果は、“Lydia Maria Child’s Postbellum Antislavery Novel: A Romance of the Republic” (雑誌論文③)で発表した。

（2）次年度は、初年度の研究成果を踏まえ、新たに発見されたヒルドレスの『アーチ―・ムーア』を取り入れ、この作品がダグラスのスレイヴ・ナラティヴやストーの『アンクル・トム』にどのような影響を与えているか、詳細に吟味した。さらに、『アンクル・トム』の成功が、ヒルドレスに『白い奴隷』を書かせるにいたった経緯についても考察を加えた。このような研究の結果、トマス・ジェファソンらに象徴される建国の理念と奴隷制という現実との矛盾を追及するレトリックが、デイヴィッド・ウォーカーからヒルドレス、ダグラス、さらにストー、チャイルドへと受け継がれる系譜をとらえることができた。この成果は、先に述べたように、“Richard Hildreth’s The Slave; or, Memories of Archy Moore: A Precursor of Antislavery Fiction” (雑誌論文②)で発表した。

ヒルドレスの重要性の発見は、本研究にとって想定外の成果であったが、その結果、1850 年代の黒人女性の手になる反奴隷制文学への考察が不十分なまま終わり、その多くが次年度へ持ち越されることとなった。

（3）最終年度は、ヒルドレスの研究により先送りされた黒人女性のスレイヴ・ナラティヴや小説を中心に考察を行った。その際に、ダグラスら黒人男性作家によるスレイヴ・ナラティヴとハリエット・ジェイコブズら黒人女性作家によるスレイヴ・ナラティヴとの違いを丁寧に吟味することで、性的搾取の問題や、個人の自由よりも仲間による協働作業を強調する点などが、ジェンダーによる相違として浮上した。

また、19 世紀の感傷小説的枠組を使いながらも、20 世紀の黒人文学へとつながる現代性をもったハリエット・ウィルソンの『うちの黒んぼ』（1859）は、ストーやジェイコブズが描きえなかった黒人批判、北部奴隷制廃止論者への批判的眼差し、さらに黒人女性の声を表現し得ている点で、単なる黒人女性による自伝的小説という従来の評価を修正する必要があることが明らかとなった。この作品の丹念な検証により、ストーの『アンクル・トム』を逆照射することができたばかりでなく、感傷（家庭）小説という従来の枠組ではとらえきれない黒人女性作家の文学を、「反奴隷制文学」という枠組で再編することが可能となった。

これらの研究成果は、“Harriet E. Wilson’s Our Nig: A Trial for Writing ‘My Own Story’ I” (雑誌論文①)で発表した。

本研究により、以下の課題が発展的に浮上した。

①本研究では、主として「反奴隷制文学」に焦点をあてたが、奴隷制をめぐる文学として、南部作家を中心に発表された「奴隷制擁護の文学」を視野に含める必要があるのではないか。とりわけ、奴隷制をめぐる議論が激化した 1850 年代には、反対論も擁護論も同様

のレトリックを使い始めていたことを鑑みると、両者の間の相互作用の検証が必要であると思われる。
②本研究が多く取り扱った女性の手になる作品は、読者を主として中産階級（白人）女性に想定しているが、そこには女性への啓蒙という要素が加味されている。この結果、19 世紀中葉の女性作家による小説と女子教育との関連を検証することが、今後の大きな研究課題となるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 野口啓子（Noguchi, Keiko）、“Lydia Maria Child's Postbellum Antislavery Novel: *A Romance of the Republic*”、*The Tsuda Review*、査読無、No. 57、2012、1-24.
② 野口啓子（Noguchi, Keiko）、“Richard Hildreth's *The Slave; or, Memories of Archy Moore*: A Precursor of Antislavery Fiction”、*The Tsuda Review*、査読無、No. 58、2013、1-21.
③ 野口啓子（Noguchi, Keiko）、“Harriet E. Wilson's *Our Nig*: A Trial for Writing 'My Own Story' I”、*The Tsuda Review*、査読無、No. 57、2012、1-16.

６．研究組織
(1)研究代表者

野口　啓子（NOGUCHI, Keiko）
津田塾大学・学芸学部・教授
研究者番号：60180717